

「主はわが牧者」

(詩編 23 : 1 - 6)

挽地茂男

2020.3.15 日本基督教団千歳丘教会礼拝

詩編の 23 編は、詩編中の詩編とも言うべき、あまりにも有名な詩編です。この詩編を愛唱し、また暗唱している方も多いのではないでしょうか。イギリスの名説教家で「講壇のプリンス」と呼ばれたス波尔ジョンという牧師さんは、



ス波尔ジョン

詩編 23 編を「詩編の(中の)真珠」と呼びました。この詩編は、神を羊飼(牧者)に例える比喩的表現の巧みさ、また全編に散りばめられた牧歌的表現の豊かさが、読む者の心に、強い印象を残します。そして同時に、その比喩的表現・牧歌的表現を通して、詩人の宗教的経験の深さ、また豊かさが伝わってまいります。

この詩編は全編を通してわたしたちの「羊飼である神」を賛美する詩編であります。詩人は 1 - 5 節で、羊飼いの 3 つの役割を例に取り上げて、わたしたちに対する神の働きと配慮を称えます。そして最後の 6 節で、その神に対する全幅の信頼・信仰

を告白します。では、羊飼いの 3 つの役割とは何でしょうか。1 つめは①羊に餌を与えること、羊の食べる牧草や水を確保することです。2 つめは②羊を導くこと。羊の先頭に立って羊を進むべき道に誘導することです。3 つ目は③危険から羊を守ることです。羊を「養い」「導き」「守る」ことが羊飼いの役割です。詩編 23 編の詩人は、この羊飼いの役割を、神さまの働きの中に確かめます。羊飼いが羊たちを「養い」「導き」「守る」ように、神もご自分の民を「養い」「導き」「守」られるのです。

詩編 23 編は、養って下さる神を賛美して始まります。1 - 3 節前半。
23:1【賛歌。ダビデの詩。】主は羊飼、わたしには何も欠けることがない。23:2 主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い／23:3a 魂を生き返らせてくださる。「羊飼」は英語では、shepherd, とか pastor と申しますが、この pastor という言葉を日本語では、牧師とか牧者とか牧会者と訳します。pastor という言葉はもともとラテン語の pasco



牧草を食べさせる、餌を与えるという言葉から作られました。神様が、羊の食べるものを心配し、彼らを養う羊飼いと例えられています。しかし、これは牧草の無尽蔵な国々、例えば、オーストラリアやスイスのような国のお話ではありません。ほとんど砂漠のような水の乏しいパレスチナにおいては、**牧草と水とは優れた牧者によってのみ探し当てられるものなのです**。か弱い羊の一切は牧者にかかっており、牧者なしには飢えと猛獣の危険から守られる保証はないのです。

旧約聖書では、羊飼いと羊の関係が、①神とその民イスラエルの関係を表す比喩として用いられます。また羊飼いと羊の関係は、②指導者—つまり王様や預言者—と民との関係を表す比喩としても用いられます。例えばエゼキエル書34章23節。「**34:23 わたし〔神〕は彼ら〔イスラエルの民〕のために一人の牧者を起こし、彼らを牧させる。それは、わが僕ダビデである。彼は彼らを養い、その牧者となる。**」もちろん「ダビデ」は預言者エゼキエルよりもずっと前の時代の人ですので、ここでの「ダビデ」は〈ダビデの子孫〉という意味で使われています。つまり、ダビデのような優れた王が現れて、イスラエル



の民を養うと言ってるのです。ここでは王が牧者(羊飼い)に例えられています。イスラエル民族は元来半遊牧民であって、アブラハムも、ヤコブも、12族長も、モーセも(ミデヤンで)、ダビデも羊を飼うものでした。羊飼いの例えは、イスラエルの人々にとって、非常に身近で理解しやすいものでした。「**青草の原**」(口語訳、新改訳「**緑の牧場**」)も「**水のほとり**」(v. 2)も羊の生命を支えるものです。羊飼いはそこに羊たちを導いていくのです。

実は1節を直訳すると「主は〈わたしの〉羊飼い」となります。新共同訳は、「わたしの」という言葉を訳していません。ヘブライ語の「**アドナイ・ロイ**」という1節の言葉には、はっきりと「わたしの」という言葉が入っています。この表現は、**羊飼いである神とイスラエルの民との一般的関係を述べているのではなく、神と〈わたし〉の個人的関係を告白しているのです**。〈わたしの〉という訳は絶対に必要です。3節の「**魂を生き返らせてくださる**」もヘブライ語の元々の表現では〈**ナフシー**・イェシヨヴェヴ〉となっていて〈わた

しの〉が入っています。主は「〈わたしの〉魂を生き返らせてくださる」のです。この詩編は〈わたし〉の信仰の自覚として歌われているのです。

「わたしの魂を生き返らせる」とは、生命の活力を呼び戻すことを意味し



ます。主がそなえて下さる牧草や新鮮な水によって、再び生命力を回復するのです。ある注解者は、「魂を生

き返らせる」という表現を、大胆に、「人を呼び戻す」と直訳します。つまりここには「人としての当たり前前の魂のありよう、魂の平静さを呼び戻す」という意味が含まれていると説明します。「青草の原」も「憩いの水のほとり」もそのような場所でもあるのです。もちろん平静さを回復しただけでは問題は何ら解決していないわけですがけれど、しかし、平静を回復した魂は、困惑や混乱や悩みを、つまり事態を冷静に見る眼をもつようになる、と述べています。その平静さは、言い換えれば、神の前にある、神が与える静けさのことです。神の前の「静思の時」が、すべての問題の解決の出発点なのです。

主イエスの語る「空の鳥」も「野の花」も鳥と花の向こうにある神を指し示すように、喉を潤す水も、食物とな

る草も、創造者である神を指し示します。それらの創造物は、身体の必要を満たすだけでなく、心の眼を開くことがあります。水や草のもつ自然のありふれた姿に、神の真実を見る時、水や草という自然の中の創造物のかけらも、わたしたちの不自然、心の乱れを映し出す鏡となるのです。神の前の静けさは、わたしたちに自分自身を静かに見る眼を与えます。その静けさは、わたしたちの心に、わたしたちの戻るところを示すのです。「戻ること」が悔い改めです。悔い改めとは、魂の方向転換を意味します。自分を覆い隠しても、虚飾で飾り立てても、神の自然は鏡となってわたしたちの本当の姿を映し出すのです。そして、ありのままの自分の姿が戻ってくる時、魂は回復を始めるのです。魂は霊的な呼吸を取り戻すのです。八木重吉というクリスチャン詩人の『秋の瞳』という詩集に「草に坐る」という詩があります。お読みします。



わたしの まちがひだった
わたしの まちがひだった
こうして 草にすわれば/
それがわかる

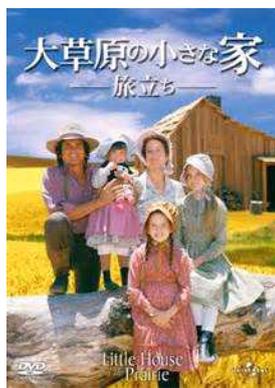
さて羊飼いの次の役割は、「導く」ことです。わたしたちを養い育ててくださる羊飼いである主は、わたしたちを導く神なのです。3節後半から4節。「23:3b 主は御名にふさわしく／わたしを正しい道に導かれる。23:4ab 死の陰の谷を行くときも／わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。」わたしの正しさは、神様の正しさと同じではありません。主が「わたしを正しい道に導いてくださる」というのは、「御名にふさわしく」正しい道、であって「わたしにふさわしく」正しい道ではないのです。なぜならその道は、主が導いてくださるのに、死の陰の谷を通り、災いを通過する可能性があるからです。主が導かれるその道は、わたしたちの主観的な正しさを超えた道なのです。しかしそれがわたしたちにとって、最善の道であることを主は知っておられ



るのです。「死の陰の谷」の「死の陰の」(ツアルマーヴェト)という言葉は母音の振り方によっては「暗黒の」(ツアルミート)と読むこともできます。死の谷や暗黒の谷という言葉によって、詩人は、徹底的な危険や混迷を表現します。パレスチナの地形には、深い谷があり、猛獣が潜む危険な暗闇も数多くあるのです。羊が足場を踏み外して滑落したり、獣に襲われる危険が、待ち受けているのです。

「大草原の小さな家」というテレビ番組が、1974年から1982年までアメリカで放映され、全部で208話の人気番組になります。日本でも1975年から1982年までNHKで放映されました。ご覧になっていた方もいるかも知れません。倉本聰原作の「北の国から」という人気ドラマは、この「大草原の小さな家」にヒントを得て作られたものです。西部開拓時代〔ドラマは開拓期のアメリカ(1870年代から80年代にかけて)を舞台、アメリカは南北戦争(1861-65年)後、鉄道網の発達と共に本格的な西部開拓時代に突入〕に新しい土地に出て行った開拓民のフロンティア精神、ないものは自分たちで造り出し、創意工夫をして自然環境の厳しさやさ

まざまな問題を乗り越えていくたくましさを見ることが出来ます。その点は原作の方がより強く出ていますが、テレビ・シリーズが興味深いのは開拓期の人々(開拓民や共同体)の生活の中にキリスト教が自然な形でとけ込んでいる姿です。共同体の中心に教会があって、家族や町全体の営みがキリスト教との深くで自然な繋がりを持っていることです。もう一つは、アメリカの脳天気なホームドラマと違って、このシリーズが「死」の問題を避けて描いているということです。



「大草原の小さな家」のシーズン1の第13話、第14話が元の英語のタイトルでは“The Lord is My Shepherd”（主はわが牧者）と題されています。このドラマの主人公となるインガルス一家は父親と母親と3人の姉妹から成る5人家族です。そのインガルス一家に、新しく男の子が誕生します。有頂天になる父親を尻目に、新しい命は間もなくして病魔に奪われてしまいます。大

きな町の病院に連れて行きましたが、その甲斐はありませんでした。当時の医学では治すことのできない不治の病でした。医者から息子の死の宣告を聞かされた夫婦が抱き合って涙しながら、この詩編23編を口にするシーンがあります。息子を亡くした衝撃にうち震え嗚咽する妻を抱きしめて、自分も涙しながらこの詩編を唱える夫の言葉に、妻は、悲しみをこの詩編の言葉で抑え込むように、途切れ途切れに夫の言葉に続いて復唱します。当時の開拓民の悲しみや困難を象徴するようなシーンです。

わたしたちの羊飼いは、「死の谷の陰」を避けて通ろうとはしません。羊飼いが手にしている「鞭(シェベト)」（v.4）は、鞭というよりむしろ、鉄の金具のついた棍棒で、それで獅子や狼を追い払うのです。「杖(アシェーン)」（v.4）は、曲がった柄のついた杖で、山路を歩いたり、羊を数えるのに使います。主の手に握られた「鞭」と「杖」があらゆる危険を乗り越えていきます。詩人は「**あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける**」と歌います。「**わたしを力づける**」という言葉は、口語訳では「わたしを慰める」と訳され、関根正雄訳では「**私に勇気を与える**」と訳されます。危険や混迷に出

会うときの、わたしの安全と力は、神の導きにかかっているのです。

主なる神はわたしたちを、養い、導き、そして守られます。5節。「23:5 わたしを苦しめる者を前にしても／あなたはわたしに食卓を整えてくださる。／わたしの頭に香油を注ぎ／わたしの杯を溢れさせてくださる。」「わたしを苦しめる者」(ツォルライ)という表現は、「わたしに敵対する者」という意味で、口語訳や新改訳では「わたしの敵の前で」と訳されています。また「油」や「香油」は歓迎・歓待や勝利の印として注がれて、喜びを表現します(詩92:11, 133:1-2)。そして「杯」もまた、歓待や勝利のしるしであり、主人から食卓の友に回されます。「あふれる」杯は、歓迎と親密さを表しています。信仰の生活には、人生を何か深刻ぶって生きるというよりは、樋野興夫先生ががんの患者さんにむかって「人生いばらの道、にもかかわらず日々宴会」(『病気は人生の夏休み』60頁)というよう肯定的な側面があるのです。サムエル記下の17章27-29節には、息子アブサロム王子の反乱軍に負われたダビデとその兵士たちがマハナインに逃れたときに、ある人々が、彼らのために糧食を提供したという記事があり

ます。ダビデの詩編とされるこの23編は、このようなダビデの生涯の一断面を織込んで歌っているとも言われます。自分を「苦しめる」敵軍を前にしても、主が食卓を用意して下さったと歌うのです。

そして詩人は、力強く信仰を告白(宣言)いたします。6節。「23:6 命のある限り／恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り／生涯、そこにとどまるであろう。」欠乏や迷いや危険を経験しない人生はありません。詩人もまた、それらを経験したからこそ、絵空事ごとではなく、**力強く**、養い主であり、導き主であり、守り主である神を賛美することができるのです。

わたしたち自身もまた、新しい1週間を、主と共に、主を讃美しつつ前進していきたいと思えます。主の養いと導きと守りが豊かにありますように、祈りましょう。

2020.3.15 日本基督教団千歳丘教会礼拝

